

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

現代イタリア事情 -Italia oggi- 第16回

* Made in Italyは健在か — イタリア産業・貿易事情 — *

立元 義弘

Made in Italy — 魅力的な響きを持つ言葉です。フェッラーリ、マセラティ、アルファロメオなどの高級車や、PRADA、GUCCIをはじめとする数あるイタリアンファッションブランドに代表されるように、世界の多くの人々にとってこの言葉は、洗練されたデザイン、卓越したクリエイティビティといったプレミアム価値の代名詞と言っても過言ではないでしょう。



古くはレオナルド・ダ・ヴィンチの発明とされるヘリコプターや、サルヴィーノ・デッリ・アルマーティという名のフィレンツェ人が発明したとされるメガネに始まり、電池・タイプライター・ファックス・スクーターなどを生み出したこの国は、製造業の分野でも一流の工業国として輝かしい貢献をしてきた国です。

しかし、“さてその製造業の分野でイタリアを代表する企業は？”と、聞かれて、すぐに名前をいくつか挙げられる人は少ないのではないのでしょうか。

冒頭で述べたようなイメージとしてのイタリアブランドはいくつも出てきますが、それを別にするとイタリアを代表するグローバルな大企業として容易に思い起こせる会社はせいぜいフィアットくらいなものではないでしょうか。

表1は、2013年フォーチュン誌グローバルトップ500社の売上高ランキングに登場するイタリア企業ですが、この中で世界的にも有名で、皆さんもその名を聞いたことのある会社はいくつありますか？ おそらくほとんどの読者は“…”という感じなのではないでしょうか。

	世界 ランキング	売上高 (10億ドル)	事業分野
ENI	17	167.9	エネルギー
EXOR Group	26	142.2	自動車
Assicurazioni Generali	49	113.8	保険
ENEL	52	109.1	電力
UniCredit Group	188	52.3	金融
Intesa Sanpaolo	221	45.9	金融
Telecom Italia	281	38.3	通信
Poste Italiane	368	30.9	郵便

【表1 イタリア企業売上高ランキング
(出典: FORTUNE GLOBAL 500 2013)】

イタリアは世界でも一流の工業国だと言ったばかりなのに、確かにこの表をながめても“なるほど”と、納得はできません。先ほどフィアットを引き合いに出しましたが、この表の第2位の EXOR Group というのが、セリエAの強豪サッカーチーム、

ユベントスなどと共にフィアットを傘下に収めるホールディングカンパニーです。米国クライスラー社との合併に向けた経営統合により、FCA (Fiat Chrysler Automobiles)として再出発したフィアットですが、それによってEXOR Groupも大きくランクを上げてきており、昨年のランキングでは世界26位で、その売上高は、例えば日本のNTTを少し上回る規模です。

しかし、世界ランキング500社の内、イタリア企業はここに掲げた8社だけです。因みに日本企業は62社がランクインしていますし、経済規模としてはイタリアよりもずっと小さいスイスやオランダでさえTOP500社の中に、それぞれ14社、11社が入っています。さらに、日本企業トップ10社の内6社が製造業であるのに対して、この8社の中で製造業と呼べるものは、フィアットを擁するEXOR Groupだけです。

果たしてイタリアは本当に一流の先進工業国と言えるのでしょうか。実は、ここにイタリアの産業構造の特徴と課題が読み取れるのです。

イタリアも他の経済先進諸国と同様、その産業構造は第3次産業への集中化が進んでおり、2012年現在の産業別就業者数の割合は、農林水産業が3.7%、製造・建設業が27.8%、商業・サービス業が68.5%という構成になっています。しかし、南欧諸国共通の傾向としてイタリアでもあげられる特徴は、大企業が少なく、中小規模企業の集積市場であるという点なのです。

具体的な数字でみてみますと、イタリアには約440万社の事業体が存在しますが、その95%が従業員10人未満の規模であり、従業員250人以上の事業体は3400社余りしかありません。因みに日本の場合、若干の集計対象基準の違いはありますが、総務省の統計によりますと約413万社の企業があり(イタリアの方が多い!)、そのうち300人以上の従業員を有する企業はおよそ16,000社となっています。(いずれも2012年現在)また、欧州各国との比較においても人口1000人あたりの企業数がイタリアでは65.8社とEU平均の42社を大きく上回り、企業あたりの従業員数も3.8人とポルトガルやギリシャに次いで低いのです。実際、ユーロ加盟国平均と比べてイタリア企業の平均規模はおよそ40%小さいと言われて

おり、中小企業が大規模企業に発展するケースはあまりありません。

こうしたイタリア産業基盤の特徴は、これまで事業の大を追わず、家族的な経営で独自の技術を活かした経営モデルとして、どちらかと言えばポジティブに語られてきました。確かに、イタリア北東部から中部にかけての地域では、金属や機械加工・精密機械などの特定分野で、名前は知られていないけれどもブラックボックス技術を武器とする優良企業が多く分布するのも事実ですが、反面、特定分野に強みを発揮しているから小規模で良いというのではなく、そうした強い特定分野は往々にして非成長分野であり、成長分野では強みを発揮できないから大きくなれない、或いはこうした事業規模の小ささが生産性向上の阻害要因となっているという側面も見逃すことができません。

従ってこうしたイタリアの産業構造の実態も、決してイタリア企業が門外不出の技術で強みを活かした堅実経営を追求してきた結果ではなく、事業規模の拡大につながるビジネスモデルが育っていないから、という方があっているのかもしれない。

さらにそれに加えて、汚職、政治スキャンダル、経済・産業界をも蝕むマフィアの暗躍、法整備や司法改革の遅れ、非効率な行政システム、乏しい社会インフラといった、数え上げればきりのないくらいに多くあるイタリア社会の諸問題を考えると、イタリアの中小企業はよくやっているなという気にさえなってきます。このイタリア社会の抱える非効率性について例えばドイツと比較してみると、建設関連の許認可を得るのに必要な日数はドイツの97日に対してイタリアでは233日かかり、電力供給契約に124日(ドイツ17日)、民事訴訟の解決までに平均1185日(ドイツ394日)といった具合だそうです。

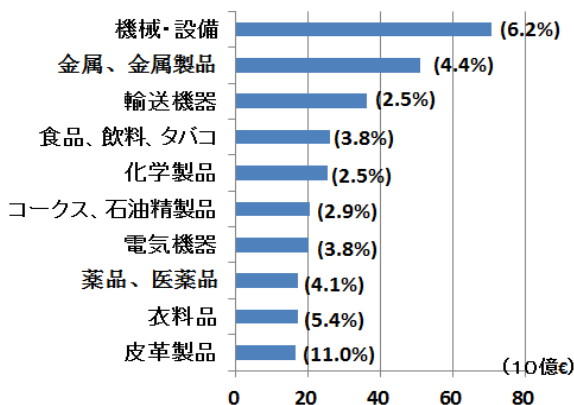
これではいくらイタリア人の優秀な企業人材が頑張っても国際的な競争力では太刀打ちの仕様がありませんし、過小資本にあえぐイタリアの中小企業が事業の拡大を目指して海外からの投資を求めても、その事業資金は集まりようがありません。

こうしたことからイタリアの国際経済における存

在感は残念ながらここ数年徐々に低下してきており、GDPでは2010年に日本が中国に世界2位の座を明け渡した同じ年にブラジルに抜かれて第8位に後退し、更にその背後にはインドやロシアがひしひしと迫って来ています。輸出についても同様で、2003年には3.9%であった国際シェアも2012年には2.7%にまで低下しています。

とは言え、イタリアは現在でも世界で9番目の輸出額を誇る国です。世界一の輸出額を誇る産品には、イタリアを代表するパスタ・加エトマトや、革製バッグ・靴などだけではなく、その他にもサングラス・クーラー・ヨット・セラミックタイル・梱包用機械など、数多くの産品があります。

Made in Italyと聞けばどうしてもファッションやクルマばかりが輸出の稼ぎ頭となっているのではと思われるがちですが、実際は機械・設備機器が700億ユーロと断トツで、イタリアの輸出総額の18%を占めています。次いで金属・金属製品、クルマを含む輸送機器と“意外(?)と堅いもの”がトップの3品目で、衣料品と皮革製品については、世界市場におけるマーケットシェアはさすがに高いですが、その輸出額はそれぞれ170億ユーロの規模に過ぎず、二つ足しても輸出総額の8%にしかなりません。(2012年 表2)



【表2 イタリア主要輸出品

(出典: RAPPORTO IOE 2013)

(カッコ内は世界市場占有率)

そして、対日貿易という観点から見ると、イタリアにとって日本は15番目の輸出相手国で、そのウェイトはイタリアの輸出総額の1.4%を占めているに過ぎず、日本の輸入総額に占めるイタリアからの輸入の占める割合も1.1%です。やはり服飾、皮革製品をまとめると最も大きなカテゴリーとなりますが、ここ数年は医薬品が大きく伸びてきており、単一カテゴリーとしては最大の輸出品となっています。

一方、イタリアの日本からの主な輸入品目は、自動車、機械、化学製品などですが、イタリアの輸入相手国としての日本の位置づけは低く、近年は大幅な減少が続いています。2012年の実績では全体の0.8%(日本の総輸出額に占めるイタリア向け輸出は0.5%)に留まっており、ここ数年の日伊間貿易は日本側の大幅な入超の状態となっています。イタリア国内の内需不振や日本企業が生産を海外に移転した結果という面はあるにせよ、かつてのテレビやビデオなどのエレクトロニクス製品に代表された Made in Japan の勢いは過去のものとなってしまったようです。

去る6月には安倍首相がベルギーで開かれたG7サミットの帰りにローマを訪問し、レンツィ首相とも会談しましたが、現地での報道でもあまり大きく取り上げられることはなかったようで、当のレンツィ首相はその翌々日にさっさとベトナム・中国・カザフスタン歴訪の旅に出発しました。残念ながら今のイタリアにとっては日本より中国をはじめとする経済新興国の方が重要なのかもしれません。

来年はミラノ万博が開催され、日本も Harmonious Diversity – 共存する多様性 – をテーマに最大規模のパビリオンで出展参加することになっていますが、このイベントが、日本とイタリアの新たな関係強化の契機となることを期待したいものです。

(大阪大学講師、元パナソニックイタリア社長)

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

『ローマでの映画美術研修』

浅田 朋子

日本の映画撮影所で映画・テレビ美術デザイナーとして働いていた頃のことである。映画美術の研修のためにローマに留学したいと思うようになった。1年間のローマ留学を可能とする奨学金制度があることを知ったからである。

ただし、この奨学金に応募するには、その時点で現地で研修の段取りを組んだ計画書と研修先の受入承諾書を提出しなければならなかった。実際には、日本で働きながらこうした研修計画を立てるのは困難だったし、また研修に必要な語学力を培うのも不可能だった。そこで、まずはそうした準備のために1年間休職して、私費でローマに留学することにした。

幸い、この私費留学の甲斐あって、その後、当初のもくろみ通りに奨学金を獲得して、さらに1年間、研修員として留学することができた。

ここでは最初の私費留学の経験から語り始めることにしたい。この時はローマの語学学校に通った。そして半年後、チネチッタ撮影所内にあるイタリア映画美術監督協会(ASC)にどうにか一人で交渉に行くことができた。

このときは、事前に日本で用意しておいたプレゼン用ファイルと、イタリア語で書いた研修計画が大いに役立ったのであるが、それにしてもやはりダイレクトに肉声で自分の言葉を伝えることの有効性・重要性を痛感した。

このイタリア映画美術監督協会(ASC)は、チネチッタ撮影所内に事務所を構えており、美術監督のみならず舞台・衣装のスタッフが数多く加盟しており、若手の育成のための映画・テレビ・舞台美術講座も開講している。私の目的の一つはこれを受講することであったが、それにとどまらず美術監督や他の関係機関を紹介してもらうことも希望していた。

幸い、事務員のアレッサンドラは非常に親切ですぐに会長と連絡を取ってくれ、その後何人かの美術監督に直接師事する承諾も得ることができた。

この私費留学の目的であった奨学金応募のための「研修の計画・準備」と「語学習得」はどうか達成できたわけである。

しかし1年という留学期間はまさにギリギリだった。これ以下の期間でこれらのことをするのは不可能だったと思う。私自身の語学力不足や人脈不足等の問題もあったが、それだけではなく、イタリアでは一般に人々が呑気に構えていて、事務手続きなど何かするときの進行が遅く、そのために相当の時間を消費したからだ。熱意だけあっても時間が無駄に過ぎていくだけだ。

よく「当たって砕けろ！外国では何とかなる」と言う人がいるが、私の経験からすると、実際には何ともならないことが多い。何とかなる場合にも、日本にいる時に比べて数倍の努力と知識が必要である。

それでも、こうした苦労や困難に打ち負かされて、「ここはイタリアだから仕方ないんだ」と妙に納得して諦めてしまったのでは、夢は実現できない。それより今まで日本で培った自分のやり方や考え方に則ってものごとを進めていくほうが、外国でも自ずと自分にあった環境に身を置くことができるし、時間はかかっても信頼できる友人や良い機会を得ることができるような気がする。

現在から振り返ると、この私費留学でのいろいろな空回りの数々も、私がイタリア事情を理解していなかったがゆえのことだったのだが、事前の旅行程度ではそこまでの認識は得られないし、現地に住んでみて初めて分かることの中は「いいこと」より「悪いこと」の方が多かったりするのだ。

ともあれ、この最初の私費留学を経て様々な経験を積んだおかげでようやく奨学金を獲得し、今度は研修員として再びチネチッタ撮影所を訪れることができた。

チネチッタ撮影所はローマ中心の駅から地下鉄で約 25 分の距離に位置しており、広大な敷地内に大規模な屋外セットやスタジオ、フィルム編集設備など、映画の撮影に必要な施設や機関がすべて揃っている。

最初の4ヶ月は先にも述べた ASC の主催する「映画・テレビ・舞台美術講座」を受講した。それぞれの分野でプロとして活躍する美術監督や衣装

デザイナー、装飾担当者が過去の作品を題材に講義を行う。受講者は若手美術デザイナーやデザイナーを目指す美術大学、専門学校の学生たちだ。誰でも受講できる訳ではなく、ある程度の知識のある者しか参加できない。そのため基礎的なことは省かれており、実践的な内容だった。

この講座を受講した後、知り合いの脚本家に紹介してもらった美術監督ブルッキエラー口氏のもとで研修を開始した。「熟練のデザイナーで優秀な人物だから勉強になるだろう」とのことだった。彼の個人事務所も撮影所内にあり、そこには彼の描いた図面や過去の映画作品で集められた膨大な量の貴重な資料があったので、これを見るだけでも非常にいい勉強になった。

日本でも恩師のデザイン画をこっそり見て勉強した(べつにこっそり見る必要はなかったと思うが、当時は大先輩に対して、見せてください！というのがなぜだか恥ずかしかった)のであったが、どこに行っても同じだなと感じた。彼はとても温厚で私が色々尋ねても嫌な顔もせず親切に仕事やセットのデザイン画について説明してくれた。当時彼が抱えていた仕事を手伝いながら、たくさんのことを学ぶことができた。そして彼が撮影所の他の部署(装置・背景部・造形部等)を回る時も同行させてもらい、職人やスタッフの仕事を見学した。

撮影所の一角には造形工房もあり、過去の作品で使用された造形物が所狭しと並んでいる。日本でも撮影所で働いていた私には、この工房がチネチッタで一番撮影所らしさを感じさせてくれる、大好きな場所であった。過去の名作に用いられた素晴らしい造形物をみているとその当時の活気を感じさせられるからだ。



【チネチッタ撮影所内の造形工房の中】

しかし、ひとつ残念に感じられたのは、そんな素晴らしい物を作る伝統が失われつつあることだった。もちろんその技術も。現在は高齢の造形職人が細々と作業しているだけで、全く活気がない。昔のように手の込んだ複雑な造形を使用する予算がないからだ聞いた。時間とお金のかかるセットは建てず、ロケーション撮影を主にするのである。過去に大作を手がけた熟練の美術監督の描く図面はスケールも大きく素晴らしいが、制作側からすればコストが大きく厄介なのだ。だからデザインの段階で話が頓挫してしまう。「チネチッタは変わった。昔はよかったなあ。」こんな言葉を美術監督や職人たちから何度も耳にした。現在の映画製作の中に自分たちの活躍の場がないことがわかっているのだ。全盛期を見てきた熟練のデザイナーや職人にとっては、フェデリコ・フェリーニ専用の第5スタジオが観光名所になっている今のチネチッタは巨大な「映画のお墓」のように見えるのだろう。

出来上がった映画作品は大切に保存される。それら過去の大作を観れば、もちろんたくさんのことを学べる。でも、当たり前だが映画制作過程は出来上がった作品からは見えてこない。技術や伝統は直接人から人へしか継承できないのだ。

例えば、夕暮れの森のシーンをスタジオでセット撮影するとしよう。屋内なので木も小川もない。いまは合成用のブルーバックで終わりがたが、合成技術なんて進んでなかった頃はすべて実際に作ったのだ。美術監督が森のシーンのデザイン画を描き、背景部が水平線に遠景の山並みを描き、造園が木を植え土を撒く。照明部が夕闇と、小川に見立てたアルミホイルの筋に照明を当てて水面の輝きを作る。撮影効果部が風を起こす。

そこには、実際の森ではなく、映画撮影のための計算された空間としての森があり、撮影スタッフ、演技者、その場にいるすべての人間がその空間を前にそれぞれの技術と知識を融合させながらカメラの前で映画を作っていく。

しかし、新しい技術の開発に伴い撮影スタイルは様変わりし、このような「古い技術」を用いた映画製作方法は失われつつある。今やこうした技術を学べる機会は少なくなり、撮影所でもその「古い

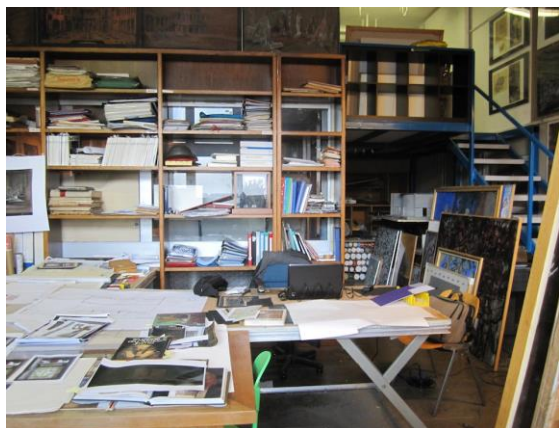
技術」が細々と受け継がれているに過ぎない。

撮影所には映画のすべてがあると私は思う。映画の歴史や技術を専門に学ばなくても撮影所にいればすべて学び、習得することができる。撮影所はいわば最高の映画学校であると思う。たくさんの若手スタッフが伝統や技術を継承してきたのである。日本でも撮影所の閉鎖とともに、このような映画を学ぶすばらしい環境がひとつひとつ失われている。悲しいがチネチッタも日本も同じだ。

私はチネチッタ撮影所での研修中にイタリア人の美術監督や職人から直接学ぶことができた。しかしこの先、こんな機会はもう無くなって行くだろう。この熟練の美術監督や職人たちがいなくなれば技術も伝統も失われ、時代は完全に変わってしまうからだ。

経済状況が悪化しているイタリアで、チネチッタ撮影所には活気が見られない。近年、日本でも撮影所が次々と閉鎖されていく中、ここイタリアでも歴史ある撮影所がこのような窮地にあるのを見ると残念でならない。

撮影所は単なる映画撮影の「場所」ではないし、スタジオはセットを建てて撮影するだけの「箱」でもない。そこには長年培われた技術と伝統があり、それを守る「映画の神様」が存在する特別な場所だと私は思っている。日本とイタリア、「映画の神様」は一体どこに行ってしまうのだろうか？



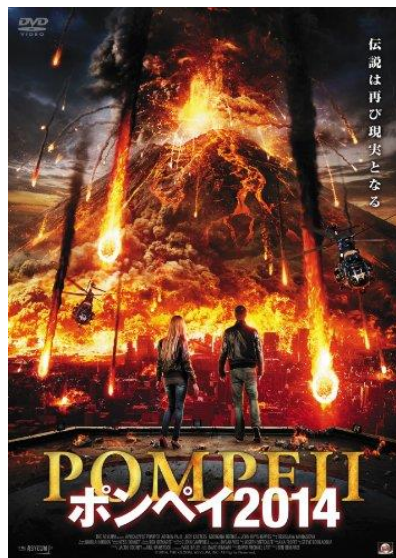
【研修を行っていたチネチッタ撮影所内のブルッキエラー口氏の事務所内】

(元当館受講生)

…会館だより…

坂井先生と映画『ポンペイ』を鑑賞する特別セミナー
「そのとき、時間が止まった。」
～幻の古代都市ポンペイの真実～

歴史アクション映画『ポンペイ』の上映を記念し、考古学者坂井聰先生と映画鑑賞した後、その興奮冷めやらぬうちにセミナーを開催します。ポンペイに興味をお持ちの方、そしてこの機会にポンペイのことを知っておきたいという方、ぜひご参加下さい！



講師：坂井 聰先生（同志社大学講師）

日時：2014年7月5日（土）17:30～19:30
（映画鑑賞は14:10～16:10）

場所：日本イタリア会館 京都本校
（映画鑑賞はMOVIX 京都）

集合：MOVIX 京都（新京極三条）入口 13:50

定員：30名（先着順）

参加費：維持会員 2,500円 受講生・一般 3,500円
（共に映画鑑賞料込み）

※セミナーのみ：維持会員 1,000円 受講生・一般 2,000円

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>